



ごうちゃんねる (GO-CHANNEL)

2023/07/29

あっさり黙示録 #66

千年王国の最後に起こるマゴグ戦争と悪魔の結末

黙示録 20 章

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。私は今、広島におります。昨日までは福島、今週末からは長野に移動します。まさに“フーテンの寅さん”状態ですね。皆さんが住んでおられるところにも、参上することがあろうかと思いますが、その時はぜひ、会場までお出でいただけたら嬉しいです。

さて、久しぶりにあっさり黙示録第 66 回目。パチパチパチ！今日は、千年王国の最後に起こる大事件についての預言です。

黙示録 20 章

7 しかし、千年（千年王国の期間）が終わると、サタンはその牢から解き放たれ、

この千年間は、非常に祝福に満ち、平和に満ち、調和に満ちた時代でした。それが可能だったのは、すべての悪の根源であるサタンが、牢の中に閉じ込められていたからです。この牢はギリシア語でアブソス。

しかし、サタンが千年間の懲らしめを受けて反省し、殊勝になっていたかという、全然そんなことはない。そこから出されると、一刻の時間も無駄にすることなく、また反逆を企てるのです。

8 地の四方にいる諸国の民を、すなわちゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海の砂のようである。

諸国の民を惑わして、キリストに対する反逆戦争を企てる、煽る、けし掛けていく。

ここから 4 つのポイントでお話しします。

1. サタンは千年間牢の中に閉じ込められていても、その本質は少しも変わらない。サタンには悔い改めは起こりません。サタンはどこまで行っても悪魔なのです。なので、サタンは千年間懲らしめの牢の中に入っていたのですが、出されるや否や間髪を入れずに、神とキリストに反逆します。

2 サタンに惑わされる地の四方にいる諸国の民は、どこから出て来た民なのか。千年王国に入るのは 3 種類の人たちです。

① 艱難時代の前に携拳されたクリスチャンたち。

彼らは二度と死なない栄光のからだを持って、千年王国に入ります。

② 旧約時代の聖徒たちと艱難時代の殉教者たち。

この殉教者たちは千年王国が始まる直前に復活し、二度と死なない栄光のからだを持って、千年王国でリーダーとして君臨します。

③ 艱難時代に生き残ったクリスチャンたち。

艱難時代にキリストを信じた人たちは、ほとんど殺されるでしょう。

しかし、生き残る人たちがいるんです。彼らは生身の体でそのまま千年王国に入りますが、その子孫が千年間におそろしく増えて、すさまじい人口増加になるんですね。どんなに人口増加しても、今の自然界ではないので食べるには困りません。

しかし、その子孫の中に、キリストを信じる人と拒む人の両方が出て来るんです。そして、キリストを拒む人たちがなんと、海の砂のようである。数えきれないくらい多い。

ここから2つのことが分かりますね。

サタンはアブソスに千年間閉じ込められ、酷い目に遭ったにもかかわらず、心が変わりませんでした。

同じように、人間というのは、千年王国という最高の環境の中に生まれ育っても、良い環境だからといってキリストを信じるわけではない。

やはり、人間は生まれつき罪の性質を受け継いでいる。

なので、千年王国に入った人たちの子孫であっても、キリストを受け入れる必要があるのです。

人間は自分で自分を変えていくことはできません。たとえ環境がどんなに良くなっても、根本的に自分のいのちの転換をすることはできないんですね。

人を変えることができるのは神だけです。

神はキリストを使って、キリストを通して、人間を新しくすることができるのです。キリストを拒否した状態では、キリストを通して人が神の前に理想的な人になること、従順な人になることはあり得ません。

千年間、面従腹背の人たちも、やがてサタンのそそのかしが始まった時、それに反応してしまう。

千年王国という理想的な環境に生まれ育ったにもかかわらず、キリストを受け入れていない人たちは、サタンのそそのかしに反応して、アンチキリストの戦争に加担するのです。

9a 彼らは地の広いところに行き、聖徒たちの陣営と、愛された都を包囲した。

聖徒たちの陣営・愛された都は同じ意味で、エルサレムのことです。

地の広いところについては、ゼカリヤ書 14 章に、エルサレムの周辺は見渡す限り大平原・平地になると書いてあるんですね。そこに軍隊が結集する。

ところで、ちょっと気になる表現があるので解説しましょう。

地の四方にいる諸国の民をゴグとマゴグと呼んでるんです。

ゴグとマゴグと聞くと、**エゼキエル書 38 章**を思い出す方が多いと思います。

艱難時代の前に、ゴグとマゴグが再建されたイスラエルに入って来るという預言、いわゆるエゼキエル戦争です。

ゴグはそのリーダーのこと、マゴグはゴグに支配されている領域と、そこに住んでいる人たちのこと。それは、**エゼキエル書 38 章**ではロシアを意味していました。

しかし、ここは艱難時代の前のエゼキエル戦争のことではなく、千年王国の最後に起こる戦争のことを語っています。エゼキエル戦争のゴグとマゴグは北からやって来る大国でしたが、このゴグとマゴグは地の四方にいる諸国の民。全世界の人々のことなんです。

なぜエゼキエル戦争に登場した名称を、関係ない戦争の説明に使っているのでしょうか。千年王国時代、エゼキエル戦争は歴史上の大きな事件として、比喻として使われていたからです。

私たちが歴史上の大事件を、比喻として現在使うことがありますよね。

例えば、関ヶ原の戦い。日本中の戦国武将が、徳川家康の軍隊とアンチ徳川の軍隊に真っ二つに割れて、東軍と西軍で戦ったんですね。天下分け目の関ヶ原。

家康が勝ち、徳川幕府の成立によって、戦国時代が完全に終わりました。

これが関ヶ原の戦い。

現在も比喻表現として使いますね。大きな勝敗を決するような勝負事や、今後の命運を決定するような大きな戦いのときに関ヶ原の戦い。

例えば、「今度のプロジェクトで契約が取れるかどうか、我が社にとって関ヶ原の戦いだ！」つまり、「我が社が今後発展していくか滅びるかを決定するくらい、重要な仕事なんだ！」ということで、岐阜県に支社をつくらうということではないんですね。

以前ゴグとマゴグがイスラエルに攻め込んだように、千年王国の終わりに、またしても、神とキリストに反逆する軍隊が出て来る。

歴史はかつてあったことと韻を踏むというか、同じようなことが起こっているということで、ゴグとマゴグに落ち着いているわけです。

しかし、その結末は実にあっけない。

9bすると天から火が下って来て、彼らを焼き尽くした。

おしまいです。

この戦争の敗北の結果、**4 番目のポイント**

10 彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。

火と硫黄の池はゲヘナ。そこはアブソスのような一時的な場所ではなく、永遠・永

久の裁きの場所です。そこには獣も偽預言者もいる。“いた”ではなく“いる”。

彼らはいつからいるんでしょう。艱難時代が終わった後、すぐさまゲヘナに投げ込まれたんですね。千年間。サタンが入るよりも千年前にこの中に入れられ、そして、サタンもその中に投げ込まれた。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。

ところで、聖書で最初にサタンが登場するのは、聖書の一番初め、**創世記**の前から3番目の章。サタンの最後の記述は、聖書の最終書物である**黙示録**の後ろから3番目の章。**創世記**に始まった歴史は**黙示録**で完結する。

あるクリスチャンは**黙示録**を読まないんですねえ。

「黙示録は難しい。難解だ。しかも、読んでいたら怖くなる」と言うのです。

なぜ黙示録は敬遠されるのでしょうか。

そういう取っつきにくさもあるかもしれませんが、私はむしろ霊的な力を感じます。

サタンは、黙示録の正確な意味を知ってほしくないんです。

サタンの最終的な敗北が決定づけられていることが、黙示録に書いてあるからです。

黙示録を通して、聖書全体の姿を、初めて正確に知ることができるんですね。

もう間もなく、この黙示録も終わろうとしています。これからも解説を続けていきますので、よろしければお付き合いください。

チャンネル登録もお願いします。ではまた とうちゃんねるでお会いしましょう。

皆さん、お元気でいらしてください。さよなら！

☆引用；日本聖書刊行会『聖書 新改訳 2017』いのちのことば社,2017